

KONAN UNIVERSITY

父親の子育て意識の可能性を探る - 「〔第二回〕 就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査」 から

著者	新道 賢一, 濱田 智崇, 川口 彰範
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	14
ページ	59-75
発行年	2013-02-28
URL	http://doi.org/10.14990/00002752

父親の子育て意識の可能性を探る

——「[第二回] 就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査」から

新道 賢一・濱田 智崇・川口 彰範

一、はじめに

「父親の子育て」が世間の注目を集めるようになって久しい。一つの転機は、二〇一〇年六月の厚生労働省による「イクメンプロジェクト」の開始と、同年末に「イクメン」が新語・流行語大賞のトップテンに入ったことによるものであろう。このような社会の動きと連動するように、近年、父親に関する研究は徐々に増えている⁽¹⁾。ところが、父親の研究の多くは、現在の父親の持つ問題点を指摘するものが目立つ。一方で、当の父親の生の声を取り上げた研究は少ない。そのため、さまざまな問題や課題を抱えながらも父親自身がどのような思いで子育てをしているのか、その姿はなかなか見えてきにくいのが現状と言えるだろう。

また、母親の子育て支援は、現在さまざまな方面からなされているが、父親の子育て支援については、ようやくその必要性が取り沙汰され、まだ端緒にすぎたばかりであるという印象が否めない。

このような中、実際のところ父親は、子育てについてどのように感じているのであろうか。いつ頃、何をきっかけに自らが父親になったと感じ、父親の役割をどのようなものであると考えているのだろうか。

甲南大学人間科学研究所子育て研究会（以下、甲南大学子育て研究会）では、二〇〇〇年から母親、父親、祖母の子育てについての研究を行ってきた。二〇〇九年には父親の子育てについての語りを聞く「就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査」を行った。二〇一〇年には三三〇名の父親から回答を得た質問紙調査「[第二回] 子育て環境と子どもに対する意識調査―父親版―」を実施した。さらに、これらの研究成果を元に二〇一一年五月からは、父親の子育て支援活動をはじめている「イクメン」がマスコミで取り上げられるようになった二〇一〇年前後以降は、父親を取り巻く状況、父親自身の子育て意識も変わりつつあるのかもしれない。甲南大学子育て研究会では、さらに父親の声を集めるために二〇一二年に「[第二回] 就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査」を行った。本論では、この「[第二回] 就学前の子どもを持つ父親への

インタビュー調査」から得られた父親の語りから、父親が子育てをする際にもつ感情、父親になつたと実感すること、父親の役割について考えること、すなわち現在の父親の子育て意識がいかなるものであるかを考察した。さらに、ここから現在の父親が子育てについて持つ可能性を探りながら、父親の子育て意識を育てるための支援をする際のヒントを探っていきたいとも考えている。このように可能性を探り、育てるという姿勢は臨床心理士の独自性・専門性を生かした営みであるとも言えるだろう。

二、方法

「〔第2回〕就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査」の概要は、図1の通りである。

今回の調査協力者は、二〇一〇年五月から二〇一二年六月にかけて就学前の子どもを持つ父親十五名である。協力者は、次のような方法で集められた。二〇一〇年に甲南大学子育て研究会によって行われた質問紙調査「〔第2回〕子育て環境と子どもに対する意識調査―父親版―」の協力者のうち、インタビュー調査への協力の申し出があり、実施の条件の合ったもの二名。筆者らが主催する父親への子育て支援活動²⁾の利用者のうち、インタビュー調査への協力の申し出のあったもの四名。男性向

「〔第2回〕就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査」
協力者：大阪近郊在住の就学前の子どもをもつ父親15名
場所：甲南大学カウンセリングセンター内の面接室
時期：2012年2月から6月
方法：協力者への60分から90分程度の半構造化面接

図1 「〔第2回〕就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査」概要

けの講演会の参加者への呼びかけに応じたもの二名。甲南大学で行われている親子の遊び教室に参加していた母親に対する呼びかけに応じたもの二名。さらに、筆者らの知人五名である。いずれもそれぞれのおかれた状況の中で子育てにかかわるうとしており、そのため筆者らのインタビューに協力し、自分の思っていることや考えていることを伝えられたら、という意志を持った父親たちといえる。この点で、世間一般の父親を万遍なくサンプリングしたとは言い難いことを先に述べておく。

協力者の平均年齢は三八・五歳。子どもの数の平均は一・三人、子どもの平均年齢(複数の場合は末子)は二・一歳。職業は公務員が四名、会社員が一名。妻が仕事を持っている者が八名、専業主婦が七名。子どもの普段の預け先は、保育所が六名、幼稚園が四名、自宅で子どもの面倒をみている家庭が五名であった。

インタビューアは筆者ら三人で、いずれも男性臨床心理士であり、また、子育て中の父親、もしくは、数ヶ月後に父親になる予定のいわゆるブレババであった。

インタビュー実施要領は以下の通りである。インタビューを行う場所は、甲南大学心理臨床カウンセリングルームの面接室を使用した。インタビューの冒頭で、二〇一〇年五月から六月にかけて実施した質問紙調査「[第二回]子育て環境と子どもに対する意識調査―父親版―」(後述)の一部を抜粋した質問紙に記入してもらった。抜粋された質問は、父親の職業・休日・帰宅時間・育児休暇制度利用の有無・母親の職業について、普段の子どものとのかかわりについてである。インタビューの質問項目は、まず、家族構成等の基礎情報を聞き取り、①子育ては楽しいか、について聞き、子どもの誕生前から現在までの子育ての様子について語ってもらったあと、②これまでの経過の中で、いつ頃何をきっかけに父親になったと感じたのか、をたずね、③父親にしかできないこと・母親にしかできないこと、について聞いた。今回は、①から③について分析をする。

今回の「[第二回]就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査」に先立って甲南大学子育て研究会が行った二つの父親についての調査研究の概要についても記しておく。一つは、二〇〇九年に行われたインタビュー調査「就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査」(以下、第一回インタビュー調査)であり、もう一つは質問紙調査「[第二回]子育て環境と子どもに対する意識調査―父親版―」である。二つの調査の概要は図2の通りである。

<p>インタビュー調査／「就学前の子どもを持つ父親へのインタビュー調査」(第1回インタビュー調査) 対象：大阪近郊在住の就学前の子どもをもつ父親21名 場所：甲南大学カウンセリングセンター内の面接室 時期：2009年1月から3月 方法：協力者への60分から90分程度の半構造化面接</p> <p>質問紙調査／「[第2回]子育て環境と子どもに対する意識調査―父親版―」 対象：2010年5月現在、神戸市東灘区とその周辺に在住の乳幼児をもつ保護者 時期：2010年5月から6月 方法：各家庭での自記式質問紙調査 回収状況：2200票配布、回収数377(回収率17.1%)、このうち父親の回答330を分析</p>

図2 以前のインタビュー調査、質問紙調査の概要

このうち二〇〇九年の第一回インタビュー調査について補足を加えておくと以下の通りである。インタビューは、今回と同じく筆者ら三名であった。協力者の平均年齢は三七・八歳、子どもの数の平均は一・六人、子どもの平均年齢(複数の場合は末子)は二・七歳。協力者の職業は、公務員四名、会社員一七名、医師一名。妻が仕事を持っている者が一〇名、専業主婦が一名。子どもの普段の預け先は、保育所が九名、幼稚園が三名、自宅で子どもの面倒をみている家庭が九名であった。協力者の集め方は、筆者らの知人、もしくは筆者らが協力者の募集を依頼した者の知人である。基礎情報確認後の質問項目は、

①子育ては楽しいか、②子どもと初めて出会ったときの様子と印象、③父親にしかできないこと・母親にしかできないこと、である。②の質問の前後に、子どもが生まれる前から現在までの子育ての様子もたずねて

いる。

いずれの調査も、大阪近郊、神戸市東灘区を中心としている点で地域に偏りがあることは先に断っておく必要があるだろう。また、インタビュアー調査は協力者に甲南大学カウンセリングセンターまで足を運んでもらわねばならず、質問紙調査は回答者自身が記入し郵便で返送するという手間がかかるという点で、いずれも子育てについてある程度意識が高いと思われる父親が一連の調査に協力している点にも留意して結果を読み解いていただきたい。

以下、質問紙・インタビュアー調査における協力者の父親による記述・発言については、へ～で示し、また長い発言の引用については、段落を下げて示すこととする。

三、子育ては楽しいか

インタビュアーでは、家族構成等の基礎情報を聞き取った後、子育てについての質問に入る冒頭で「子育ては楽しいですか」という問いかけをしている。協力者が「子育て」という営み全体について基本的にどのよう感じているのかをうかがい知ることができる問いとして、子育てにまつわる具体的な出来事や父親と母親の違いなどを聞く前に、あえてたずねているものがある。

表1 「子育ては楽しいですか」の問いへの応答

	第1回インタビュー	第2回インタビュー
①楽しいだけではない	10名	6名
②楽しい	5名	8名
③自分は楽しい	2名	1名
④楽しくない	2名	なし
⑤子育てとは?	2名	なし
計	21名	15名

今回のインタビュアーの語りを検討したところ、第一回インタビュー調査と同様の分類⁽³⁾が可能であると思われた。第一回と今回のインタビューでみられた応答を分類した結果をまとめたものが次の表1である。

「①楽しいだけではない」は、へまあ、楽しいか楽しくないかで言われたら楽しいですけど、大変と言っているのは大変ですね～など、子育てという営みを「楽しい」という言葉だけでは表現できないものとして語っているもの、「②楽しい」は、へ楽しいと思いますよ。

毎日成長するじゃないですか。なので、そういったのを見てると楽しいです～など、屈託なく楽しさを肯定するもの、「③自分は楽しい」はへ(私が)やっている範囲では楽しいです。仕事しているから関わりって限られるじゃないですか……など、自分の関われない部分での子育ての大変さを示唆するもの、「④楽しくない」は、へ楽しくもないですよ～など、楽しさを率直に否定するもの、「⑤子育てとは?」はへ自分がしている

ことは子育てといえるのかどうか……と、そもそも子育てとは何をする事なのか、と問いはじめるものである。

今回、「④楽しくない」「⑤子育てとは？」に分類される応答はみられなかった。これは、協力者の人数が少ないことや、後で触れる協力者の層の違いが影響していると思われる。

第一回は「②楽しい」に分類された応答が全体の約四分の一であったのに対し、今回は約二分の一を占めており、今回の調査協力者は全体として子育てに対して肯定的な意識を抱いている父親であると考えられるだろう。

四、父親になったと感じた時期ときっかけ

前章で、約半数が「子育ては楽しい」と語った協力者であるが、父親になったと感じた時期についてたずねると、ばらつきがみられた。

そもそも父親はいつ、何をきっかけに父親になるのであろうか。文字通りの意味では、子を持った時点で男性は父親となる。しかし、父親自身の実感としては、必ずしもそうではないようである。

甲南大学子育て研究会では、父親がいつ、どのようにして自らが父親になったと感じるのかについて調査してきた。まず、二〇〇九年に行われた第一回インタビュー調査では、協力者に

自らの子育てを振り返ってもらう中で、妻の妊娠・出産を経て子どもに出会ったとき、子どもに対してどのような印象を持ったのかを聞いてみた。この中で、出産直後の子どもについて「子どもやハサル」のようだった、もしくは、へかわいいとかがそういう感情はわかかなかった、へいや、もうなんか戸惑い」とわが子だというへ実感がなかった」という声が少なからず聞かれた。では、いつ頃生まれてきた子どもが自らの子であると感じたのか聞いてみたところ、出産直後から退院まで、出生後数週から半年以内、子どもがこぼを獲得する時期以降の三つの時期に分かれることがわかった⁽⁵⁾。これら三つの時期は、子どもが生まれた、子どもと生活をともにするようになった、子どもと意思疎通ができるようになったと感じられた時期に相当すると考えてよいだろう。ここから、父親は、生まれてきた子どもを自らの子どもであると感じるまで、つまり心理的に父親になったと実感するまでに一定の期間を要することがあり、その長さも父親によって異なることが明らかになった。

このインタビュー調査を元に、二〇一〇年に行われた質問紙調査「(第二回)子育て環境と子どもに対する意識調査―父親版―」では、いつ頃から父親になったと感じたか、をたずねてみた。具体的な質問項目は、「お子様の誕生日後の時期を通じて、いつ頃から父親になったと感じたかあてはまる番号に一つだけ○をつけてください。また具体的な時期がわかれば()

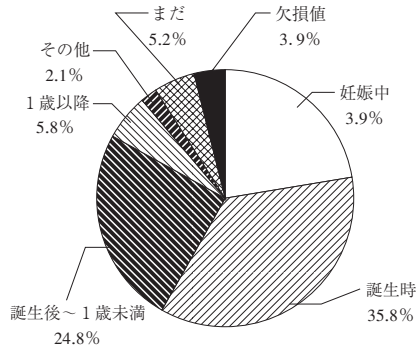


図3 父親になったと感じた時期

表2の通り、六つにまとめられた(7)。

今回のインタビューでは、父親になったと感じた時期とそのきっかけについて、質問紙調査よりもさらに具体的なところ明らかにになるのでないかと思ひ、協力者の声を聞いてみることにした。

まず、父親になったと実感した時期については、先の甲南大学人間科学研究所第三期子育て研究会の分類(8)にあてはめると、以下のようになった。

妊娠中としたものが一五名中(以下同様)一名、誕生時が四名、誕生後から一歳未満が三名、一歳以降が一名、時期はわからないと明言したものが一名、インタビュー中父親になったと

の中にお書きください」というもので、「妊娠中」、「誕生時」、「誕生後〜一歳」、「一歳以降」、「まだ」、「その他」という六つ選択肢を用意した。選択肢による質問の結果は、図3の通りである(6)。また、自由記述式の質問への回答から、「パパの気持ちになるきっかけ」が

表2 パパの気持ちになるきっかけ

- | |
|--|
| ①わが子の存在を実際に感じたとき
妊娠の判明・エコーの写真・胎動を感じたとき・生まれた瞬間・はじめて抱いたときなど |
| ②ふだんの子育てで、子どもに関わったとき
おふろ・おもつ交換・授乳・ねかしつけなど |
| ③子どもと気持ちが通い合ったとき
こちらの働きかけに反応したり表情が出てきたとき・笑顔を見たときなど |
| ④子どもの成長を感じたとき
首がすわったとき・歩き始めたとき・離乳食になったときなど |
| ⑤夫婦の生活スタイルから、子どもを迎えた生活スタイルへと変わること
母子が退院するまでの通院時・一緒に生活の開始時など |
| ⑥家族や会社など、周囲に“父親”の立場・役割でふるまうこと
職場に報告したとき・親に連絡したとき、育児休暇をとったときなど |

いう実感があつたと語つたがそれがいつであるか言及しなかつたものが一名、父親になったという実感がまだないとしたものが四名である。半数近くの計七名が誕生時から一歳になるまでに父親になったと感じたと述べているものの、妊娠中からまだないというもので、ばらつきがあることがわかる。

また、父親になったと感じたきっかけについて、甲南大学人間科学研究所の分類(9)に従つて語りをみてゆくと、表3の通りとなった。こちらにも、時期と同様ばらつきがみられる。

今回のインタビューでは、「①わが子の存在を実際に感じたとき」に当てはまる回答が一番多かった。四名中三名が子どもと初めて対面したとき、一名は妊娠がわかったときと述べてい

る。

「②ふだんの子育てで、子どもに関わったとき」は一名で、今回の協力者は自らの子育てを回想しながら、当初おそろおそろ子どもにかかわっていたが、そのような思いが少なくなった頃、時期にして「三ヶ月とかかも」という。

「③子どもと気持ちを通い合ったとき」は一名で、七ヶ月くらいの頃に「子どもがこっとしてきたとき」だと述べている。

「④子どもの成長を感じたとき」は一名、父親になったという明確な時期があるのではなく、「日々の娘の言動とかを見て、徐々に徐々に、毎日父親になったと思っっているというふうな感じ」と述べている。

「⑤夫婦の生活スタイルから、子どもを迎えた生活スタイルへと変わる」とは一名で、「へきつかけ……」。でも、生活を本当に一緒にするという感じですかね。家に帰っておって、休みの日もおつてとか、なんかそういうふうな」と述べている。

「⑥家族や会社など、周囲に「父親」の立場・役割でふるまうこと」は一名で、「父親になったと感じた、一番感じたのは出生届出した時ですかね」と回想し、住民票に名前が三人並んでいるのを見て、「あーオレも父親になったのかなーって」感じたと述べている。

上記の①から⑥に当てはまらない「⑦その他」は二名であった。一名は、共稼ぎの夫婦で自らも育児休暇を取るなど、父親、

母親関係なく同じように子育てにかかっていたが、三歳くらいで本格的にサッカーを教えはじめた頃に、「これは男の仕事かもしれないと思いましたね」と父親にしかできない役割を感じたと述べた。もう一名は、父親になったと実感した時期については「忘れた」と言及しなかったが、「自分の行動、自分の行動が子どもの何か行動に反映されるのかな」と思い、「自分を律するようになった」ことが父親になったと感じたきっかけであると語った。

これらの結果を見ると、どのような要因が男性を父親になることを促すのかを示しているように思われる。先に示した、「①わが子の存在を実際に感じたとき」からは、子どもの存在自体が、男性に父親となったという実感を生み出させていることがわかる。しかし、それだけでは足りない場合もあることは二〇〇九年の第一回インタビュー調査で、「実感があった」と語った父親がいることからわかるだろう。そのため、「②ふだんの子育てで、子どもに関わったとき」、「③子どもと気持ちを通い合ったとき」、「④子どもの成長を感じたとき」にみられるように、子どもと直接かわかることも重要となってくる。さらに、「⑤夫婦の生活スタイルから、子どもを迎えた生活スタイルへと変わる」と、「⑥家族や会社など、周囲に「父親」の立場・役割でふるまうこと」のように、夫婦や家族の関係、社会との関係の中でも父親となった実感が育まれることがある

表3 父親になったと感じたきっかけ

きっかけ	協力者	協力者の発言
①わが子の存在を実際に感じたとき	010	お腹に赤ちゃん、妊娠しましたっていった時。(中略) ありきたりですけど、責任感ですかね。ありきたりの言葉ですけど、父親として、今までやったら、それこそ職が無くなっても、ええかなぐらいの、なんか、そんな気持ちだったんですけど、父親になったら、もうけどこれ、次何して働けるねんって言われたら、やっぱり難しいもんありますしね、だからちゃんと働いて、金稼がなあかんって言うことぐらいでですかね。それからすぐ、喜ぶしかなかったです。
	001	僕自身は、生まれた瞬間から父親になったという意識は持っているつもりです。
	004	妻が子どもを産んで、ちょうど胸の上で抱っこしてた時ですかね。だから、出産が終わって、僕が別室から入っていった時ですね。(中略) 中に入って行って、穏やかかな顔をして、母親の胸の上にこうのおんぶりとした顔をしてたんで、まああれはもう感動で、ああこれで父親になったんだなっていう思いでしたな。
	011	子どもを見たときに、先ほどから話じゃないですけど、守ってあげる、この子に僕の一生捧げてあげなあかんって言う、ことだと僕は思ってますけどね、今でも。
②ふだんの子育てで、子どもに関わったとき	013	3ヶ月とかかもしれないですよ。だっことも、もっとはじめ怖い感じがあったんですよ。いいの、これで、とかね。首が、とかね。もし、がくってなったら大丈夫なの、とかね。なんかそういうことばかりが、頭にあって。ただそれは日々、接することでクリアになってきて、あっ大丈夫なんや、結構大丈夫、結構なんか荒くこうやっても大丈夫なんやとか。例えばベッドからバーンて落ちてても、や、結構大丈夫なんやとかね、なんかそういうのがこう、クリアになってきて段々や、安心できて一、ってところが多かったと思いますけどね。なんかほんとに、ささいなこと、ささいなことってなんかおかしいですけど、に分らないことがクリアになっていったってのがすごくおっきいかも。
③子どもと気持ちの通い合ったとき	008	だから、はっきり言うたら、生活の中の過程の中なんですけど。まあ子どもがにこっとしてきたときですね。だから子どもの笑顔。かなあ。育休とって3・4ヶ月、月齢で言うると7ヶ月くらいで、やっぱりこうにこっとしてきた。
④子どもの成長を感じたとき	003	明確にはわからないというのが答えます。日々の娘の言動とかを見て、徐々に徐々に、毎日父親になった、父親になったと思っているというふうな感じでしょうかね、あえて言えば、今でもまだ父親になれていない部分もあると思いますし。だから、この機会をもって、おれは父親なんだというふうに思った時点というのはわからない。ある意味では、生まれた直後でも生物学的には父親ですし、社会的にもそうですし、生まれたときだとも言えるんですけども、気持ち的には毎日だんだんと右肩上がりで父親になっていっている気がします。
⑤夫婦の生活スタイルから、子どもを迎えた生活スタイルへと変わる	009	嫁の実家からこっちに帰ってきて、生活が始まったので。たぶん自覚としたら今年になってからですね。それまではなんとなく意識の中では思っていましたけど、実際に生活してからです。自覚としては。きっかけ……。でも、生活を本当に一緒にするという感じですかね。家に帰っておって、休みの日もおってとか、なんかそういうふうな。いつという感じじゃないんですけど、そういう生活がずっと続いて、いるのが普通になったときというんですかね。
⑥家族や会社など、周囲に“父親”の立場・役割をふるまうこと	014	父親になったと感じたか。父親になったと感じた、うーん。難しいな。父親になったと感じた、一番感じたのは出生届出した時ですかね。名前、区役所持って。書いて出して。何かあの、その日に登録して住民票いただけるんで。それ見て3人並んで、あー俺も父親になったのかなって言う。感じたのは割とそこが強いんですね。若干理屈っぽいんですけど、きっかけが。
⑦その他	002	本格的に子どもにサッカーを教え始めた頃からですかね。3歳くらい。父親にしかできない役割って言う部分かなと。フィジカルであったり、外敵と向かい合う時の姿勢であったりとか。そういうのって母親はそういうことを教えるポジションではないな、と。これは父親にしか。うち基本的に男の子ってあんま関係なく親子で括りて向き合ってたんで、性差をあんまり感じるような機会ってなかったんですけど。そのスポーツって言うのを通じて何かそういうトレーニング的な事をやり始めたら、これは男の仕事かもしれないと思いましたね。
	006	日々の、自分の言動とか行動を見られてるんですよ。結局は、なんか親が立派なことを言っても、親がしなければ話にならない。親がまあ言ったら汚い言葉を使ってる、まさに子は親の鏡で。だから、やっぱりそんなに無茶な、恥ずかしいことができないなって。何か、やっぱりその、そういう意味では大人になるっていうのはこういうことなのかなって思うんですけどね。ほんとに無茶なことを、お酒の飲み方とかでも若干、やっぱり抑え目になりましたね。ペロンペロン帰ってくるのと、子どもが出来てからはほとんどないですね。自分の行動が子どもの何か行動に反映されるのかなって思うようにはなりましたね。そんな立派なことしてないですけど、まあちょっと自分を律するようにはなったと思います。

こともわかる。ここから、父親とは、子どもを持った男性というだけでなく、子どもとかわり、妻などをはじめとする家族とかかわり、さらに社会の中で父親として認められ、父親として振る舞う存在であるともいえるだろう。男性は、子育てを通じて父親になる、といってもよいかもれない。男性を父親たらしめるためには、子育て参加を促すことが必要である、ともいえるだろう。

一方、二〇一〇年の「第二回」子育て環境と子どもに対する意識調査「父親版」で「いつ頃から父親になったと感じたか」という質問に対して、五・二パーセントの父親が「まだ」と回答していたように、今回のインタビュー調査でも実に四名が「まだ」と述べている。今回は、その理由についても聞いているので、以下に紹介していきたい。

協力者5…自分がこう、家内のストレスフルな生活も含めて、ストレスを少しでも解消できるような状況に引っ張りきれていないところがあるので。家として、家の長として、そこまでできていないし、だから、そういう意味で言ったら、まだまだお父さんの、ホンマのお父さんでないかなってことですね。ただ、お金稼いで、家に渡して、生活に不自由がないことは、まあ、それはできていますけど、そういう意味じゃないと思っている

んですね、お父さんって。子どもと、家内と、みんながこう、楽しく過ごせるおうちを作れているかって言うたら、まだまだその理想には行っていないので、そういう意味ではお父さんじゃないなってことですね。

父親は家族が楽しく過ごせるおうちを作るものである、という「理想」を実現できていないため、まだ父親ではないという。さらに別の父親の発言を紹介する。

協力者12…うーん、いや僕まだなってないと思いますわ。まず大前提として、僕にはねばらないがやっぱあるんですよ。父親はこうあらねばならない。そこに届かないのはわかってますわ、まあとりあえずでも、こうしたい、っていう部分が、その手前にあって、それをまだ僕はできてない。例えば、時間的な部分もあるし、体力的な部分もあるし、どうしていいかわからない部分もあるし。だからですかね。

ここでは「理想」という言葉は使われていないものの、へねばならない」ということができていないために、まだ父親になっていないという。

また別の父親は、へそういうことは、今の今まで感じたこと

がなかったのです。ちよつと。うーん」と戸惑いを見せた上で次のように語った。

協力者7…自分の父親は必ずシニアになっているので、父親っていったら、そういうシニアのイメージがあるので、今、自分自身はヤング、ヤングチルドレンですけれども、今、自分自身はヤング、ヤングチルドレンですけれども、父親として、自分が見てきた父親と自分の父親に対しては違いがあるっていうのはそういう意味でチルドレンというのが話になったので認識しているんです

独特の表現が使われているが、ヘシニアである自分の父親と比べて、自らはまだヘヤングでありヘチルドレンであるため、父親であると感じたことがなかったのだという。ここでも「理想」という言葉は用いられていないものの、自分の父親を一つの理想のような形で語っているといえよう。

もう一人の父親は、へ産まれた時に、お父さんになったとは思いましたが、なんかこう……。なんかその……。心に染みてなつたと感じたっていうわけではなくて。客観的事実としては、なつてるんですけどね。なつてるんですけど、あーお父さんになつたなーって思ったって感じではないですね」と逡巡し、心に染みていない理由を以下のように語った。

協力者15…なんでしようね。なんか例えばこう、なんか子どものピンチがあつて、その場でこう、それこそ守らなみたいになつたら染みるのかなー。あんまピンチはなかったような気がする。子どものピンチですね。例えばあの、学校とかの、幼稚園でも良いんですけど、いじめにあつたとか。そういうのんやと、もうなんかかせーなみたいな感じに。父親としてなんかせーなとか、は思つかなど思うんですけどね。やつば今のところその、機嫌良くというか、気もち良く生きて欲しいみたいな風には思ってるんですけど。それが出来てるなと思ってるんで、なんかその父親としてなんかせな、みたいな感じがあんまないですね。

ここにも「理想」という言葉は語られてはいないが、背景には父親は子どもをピンチから守るべきという思いが垣間見られる。先の「へねばならない」と同様であると考えられるだろう。以上のように、今回のインタビュウの「いつ頃から父親になつたと感じたか」という質問に対して「まだ」と答えた四名からは、いずれも父親はこういうものであるという「理想」や、こへあらねばならない」という思いが存在することが明らかになつた。

この結果をどのように考えるべきであろうか。父親とはこの

ようなものである、という理想を持っていることが、父親になったという実感を持つことを妨げることがある、というのも一つの見方であろう。もしそうであれば、父親のなすべきことや、あるべき姿を周囲があまりうるさく言わないことが必要になるかもしれない。

また、協力者の考える「理想」を見てみると、その内容はさまざまである。それぞれのおかれた状況や、自らが抱くイメージによって「理想」が形づくられているといえるだろう。まだ父親になったと実感していない協力者は、「生き生きと家族のなかで立ち振る舞う『父親』モデルをもっている幸運な男性は、そういない」⁽¹⁰⁾と言われる現代において自らの手で父親のあり方を模索しようとする姿とみることもできるかもしれない。

いずれにせよ、現代においては父親になることが、そう簡単でなさそうであることが父親自身の声から明らかになったのではなからうか。

五、父親の役割をめぐる意識

今回のインタビューでは、「子育てにおいて父親にしかできないこと」「子育てにおいて母親にしかできないこと」をたずねている。

これに先立ち、質問紙調査「(第二回)子育て環境と子ども

に対する意識調査―父親版―では、「子育てにおいて父親にしかできない(母親にはできない)ことがある」および「子育てにおいて母親にしかできない(父親にはできない)ことがある」という質問項目に「非常にそう」「まあまあそう」「あまりそうではない」「ぜんぜんそうではない」の四件法で答えてもらった上で、「非常にそう」「まあまあそう」と答えた人には自由記述で内容をたずねている。それらを分類した結果、「父親にしかできないこと」として多かつたのは、出現度数の多い順に、「体や力(を使うこと)」「男性として(男性にしかわからないことを教える)」「厳しく(接する)」であり、この三カテゴリーで全回答数の六割以上を占めていた。また、「母親にしかできないこと」として多かつたのは、「母性的に接すること」と「授乳」であり、この二カテゴリーで全回答数の半数を超えていた。これらに続き、「授乳」とほぼ同数で「女性として(女性にしかわからないものを教える)」と「日常の世話」が挙げられていた。

以上を踏まえて今回のインタビュー結果を分類してみると表4のようになる。まず、「父親にしかできないこと」は、「体や力」と一五名中四名が答えているものの、「男性として」「厳しく」と答えた人はゼロで、質問紙で六割を超えた三カテゴリーは今回のインタビューでは、それほど目立たない結果となった。このほか「わからない」二名、「ない」「なくしたい」が各一名

表4 父親の役割意識

協力者	父親にしかできないこと	母親にしかできないこと
1	母親を補う女性	として
2	体や力	母性
3	体や力	授乳
4	体や力	母性
5	ない	ない
6	なくしたい	日常の世話（でもなくしたい）
7	母親を補う	ない
8	体や力	授乳
9	母親を補う	授乳
10	母親を補う	母性
11	母親を補う	母性
12	わからない	わからない（があると思う）
13	わからない	もしかしたらないかも
14	母親を補う	母性
15	母親を補う	母性

以外は、質問紙ではあまり見られなかった内容であり、今回これを「母親を補う」と名付けて分類した。七名が該当する。これについては、後ほど詳しく述べる。

一方、「母親にしかできないこと」については、質問紙における二大カテゴリー「母性」と「授乳」が一五名中九名であり、質問紙の時とあまり大きな傾向の違いはなさそうであった。

今回のインタビューで初めて現れた父親の役割カテゴリー

「母親を補う」について、実際の発言を引用しながら紹介する。まず、このカテゴリー名を採用する根拠となった、直接「補う」という表現で述べられている協力者の発言である。

協力者15…お母さんにないものを、補うという意味でお父さんがいると思うんです。必要やと。だから、お母さんとかお父さん一人だけよりも二人の方が良いと思う。補うという意味で必要やと思うんですけど、それが例えばそのさっき言ったお父さんの方が恐いみたいな方が絶対良いとは思わない。こう補えるのが二人いる方が絶対良いという感じですかね。（中略）それが何っていうのはないんです。お母さんにできないことを補う、逆でも良いんですけど、お父さんにできないことをお母さん補うっていう。

特に何と具体的に役割を限定するのではなく、とにかく母親を補うのが父親の役割であるとしている。逆に母親は父親を補う役割であるとも述べている。両親（夫婦）の関係をベースにし、状況に応じてフレキシブルに対応することが想定されていると思われる。両親の関係の中で協力しながらバランスを取るといった意味では次の協力者の述べていることにも通じるのではないだろうか。

協力者1…父親、母親の役割分担というか、二人が一緒になって怒ったら、やっぱり子どももどうなるかわからないし、逆に甘やかしてもしまっても駄目なんで、お互いにその辺はバランスをとりながら、奥さんが怒るときは控える。奥さんが怒らんとときは僕があえて怒ったり、その辺はうまいこと見ていますけれども、父親にしかできないこと、うーん、ちよつとそこはあれですね。難しいな。協力関係の中でしか考えられないですね。協力していく中で。

協力者1は、子どもへの関わり方が偏らないように、バリエーションを持たせるということ想定しているが、次の協力者10も同じ点を指摘していると考えてよいのではないだろうか。

協力者10…母親がおつて父親がいるつていう、なんとうか、役割分担といえますか。それは父親しかできないと思います。(中略)ほとんど叱らない、あんたは甘いって言われるんですけど、まあけど、あの、もう一枚おることで子どもも違うやろし、二人で関わっていくということができないじゃないですか、これが父親にしかできないってことですよ。

協力者11は、多少、質問紙自由記述の分類「男性として」に近いものを含み、性差による役割意識が背景にあることがうかがえるものの、全体としては母親と補いあうことが想定されていると考えられる。

協力者11…母親つて言うのは、NO言う人やと僕思つてる。母親が教える、つていうことね。いろんな事。父親つてやっぱ女じゃないんで、わからない部分が、温度差あるじゃないですか。でもいろんな事に関しての、許せるつてことに関しては父親のほうができると思う。(中略)

その、僕の、体感でできることに關しての教える、とかは、教えられると思うんですけどね。その、人間としての、生活していく部分に關しては、妻のほうができると思うんで。

協力者14は、母親にしかできないこととして「母性」を強く意識しており、母子の結びつきは強固なものとして前提としつつも、そこに立ち現れる第三者として、積極的に父親の役割を捉えていることが特徴である。

協力者14…ウチの形だと子どもと母親がまず強く繋がつてる。で、そこに父親、私がいることで、例えばお母さ

んが機嫌が悪い時にはお父さんの所にいくとか。お母さんが手が離せない時にはお父さんが抱っこしてるとか。なんていうのかな、家族の中ではあるんですけども、子どもとお母さんとの関係の中で、初めて登場する第三者みたいな。だからある程度外の風を入れていくっていうのは、やっぱりこの二人だけだとどんどんどんどん者詰まってっちゃうと思うんですね。

次の二人の協力者は、直接的な子どもとの関わりに焦点を当てておらず、母親を支援することに焦点を当てている。これも、「母親を補う」ひとつの父親のありようと考えてよいのではないだろうか。

協力者7…嫁さんの後方支援じゃないですけど、掃除とかは僕が週に一回は大掃除という形でやって、寝る前に二〇分ぐらい片づけてで調和は取れていると思います。(中略)率先していわゆる育メンみたいなオムツ替えたりとかはやっています。子どもとの接し方というよりは、お母さんが子どもと接している後方支援として一生懸命頑張っていると思いますね、はい。

協力者9…たぶん母親を楽にしてあげるといふ。なんか

そういう役目はできるんかな。できひんことのほうが多いので。おっぱいあげたりとか、あと平日は働いているので、その間の面倒を見てもらうしかないじゃないですか。それを休みの日とか、夜とか、そういうときに楽させてあげるといふことですかね。

ここまで見てくると、内容に多少の違いはあるにしても「母親を補う」というポジションを父親自身が「積極的に」担おうとしていることがうかがえる。これは第一回インタビューで、われわれが衝撃を受け、その後の調査内容を策定する端緒となった、父親たちが異口同音に「母親にはかなわない」と発していた事態⁽¹⁾と比較すると、非常に大きな違いである。第一回インタビューでは、父親は母親に「敗北感」を味わっており、現実にはよく子育てに携わっている人でも「自分のやっていることが果たして子育てなのか」という疑問を持つ、父親の役割は「ない」のではないかと危惧するなど、圧倒的な母親の「母性」の力の前になすすべもない、といった様相であった。今回のインタビューでも母親の役割として「母性」は強く意識されている。しかし、それはそれとして認めた上で、それでも父親の役割はあるだろう、それが母親を補うということであっても積極的に引き受けようという気概が感じられることが、今回の大きな特徴と言える。つまり、母性という点ではかなわなくても、

それを補う役割は父親に残されている、ということを担当の父親自身が意識できていることが、今回のインタビュー結果からうかがえるのである。

この違いの理由を考えてみる。一つは、第一回インタビューを実施した後、厚生労働省の「イクメンプロジェクト」が開始され、父親が自分の子育てを肯定的に受け止めやすい社会的な雰囲気、わずかながら形成された、ということも考えられる。しかし、今回の場合、やはり協力者の層の違いを考慮するほうが妥当であろう。つまり、第一回インタビューの協力者は、調査担当者の知人に声をかけて集めたのに対し、今回のインタビューの協力者は、質問紙調査に回答した上でインタビューへの協力を申し出た人や、子育てする父親が集まって語るイベントで協力を申し出た人などが多いため、より子育てに積極的にかかわろうとする男性が集まったと考えられるのである。そのため、「母親を補う」という役割を積極的にとらえ、実行する父親の姿が浮き彫りになったと思われる。

その意味で、今回のインタビュー結果では、現代日本の父親のごく一部の層の父親の役割意識しか明らかになっていない、と言えは確かにそのとおりであるが、第一回インタビューおよび、より「父親一般」に近い群を対象とした質問紙調査を合わせて考えると、それなりに全体像が想像できる。父親は、母親の役割として「母性」なるものを強く意識していることは間違

いなさそうである。それに対し、「かなわない」でとどまっている人もいれば、それほど深く考えずに「父親は体や力を使つたことをすればよい」と意識している人もいれば、それを前提としつつ父親の役割を積極的に見出そうとする、子育てに深く関与している人もいる、ということであろう。父親の役割意識には、母親の「母性」に対する態度という意味で大きなばらつきがあると言える。

ここで忘れてはならないのは、質問紙にも回答しない、こうした調査では把握が難しい、子育てに関して無関心、あるいは関わりたくても関われない層がいるであろうことである。父親の子育てへの関わりを増大させていくためには、こうした層にいかに関わりかけるかが最も重要であるが、それは相当難しいことでもある。ただ、そのヒントになると思われることが、今回の結果にある。協力者7や協力者9は、決して子育てそのものに大きく関与している人ではない。むしろ仕事に追われてなかなかできない、大部分は母親に任せざるを得ない人たちである。これはある意味では、現代日本の多くの父親の状況であり、この人たちの役割意識が参考になると思われる。ここでは「後方支援」あるいは「母親を楽にしてあげる」という表現が使われているが、仕事に追われて直接子どもに関わる機会が多くなるとも、そうした形で間接的にかかわることも「子育てに参加」であり、それを肯定的、積極的に「父親の役割」として意識す

ることが、重要ではないかと思われる。

六、まとめ〜子育て支援の新しい可能性に向けて

本論がここまでで明らかにしてきたところによれば、現代日本の乳幼児を持つ父親は、子育てをおおむね「楽しい」と思いながらも「母親にはかなわない」と感じている傾向があると言える。そして、父親になったという実感、あるいは父親の役割意識や理想像といったものをめぐっては、個人差が非常に大きいということも言えるであろう。それはすなわち、男性が父親に「なる」までには、さまざまな体験のプロセスが必要になることを、改めて示しているのではないだろうか。その体験の中にはまず、子どもという理屈ではとらえきれないものに、どちらかと言えば理屈や思考といったものに偏ることの多い男性が出会っていく、つまり動物的、本能的な部分を活性化させるような、子どもとの生々しい出会いが含まれる。また、現実的な意味での子どもとの関わり（世話等）を体験することも含まれるし、さらに、妻との関わりの中で、あるいは社会との関わりの中で自分の役割や力量と向き合わざるを得なくなる体験や、自分の親との関わりがありようが影響を及ぼすこともあると思われる。こうした様々な要素を含む体験を通して、男性は少しずつ父親になっていく、いわば父親の子育て意識を育んでいく

のであろう。

そうした父親の中の子育て意識の育ちを支援するという発想は、母親を中心に志向されてきたこれまでの子育て支援の中には含まれてこなかった。そして、男性たちも、自らが父親になっていく体験のプロセスについて、主体性を持って実感を語ってこなかったし、そうした機会もなかったのである。われわれの企画したシンポジウム⁽¹²⁾で、指定討論の大山泰宏氏⁽¹³⁾から「意識の公共化」の必要性が指摘された。こうした父親の中に育ちつつある子育て意識のありようを、その主体的な語りの中から拾って公にする、たとえば、まず子育て支援の議論の中に提示することが必要であろう。

「イクメンプロジェクト」をはじめ、世の中の声に押される形ではあるにしても、これまで「かなわない」からと母親に任せていた子育てに、現在「健気に」男性が近づこうとしているのは確かであろう。ようやく主体性を持って実感を語ることでき始めた男性の子育てについて、それを拾うわれわれの試みも始まったばかりである。今後さらに、父親の語りを支えるような子育て支援の実践を重ねながら、父親の主体的な、生の声を拾い、臨床の知として積み重ねていきたいと考えている。

- (1) 尾形和男『父親の心理学』北大路書房、二〇一一年。
- (2) 大阪市男女共同参画センター主催「子育てパパの語り場」。開催期間は、二〇一一年五月から二〇一二年三月まで。
- (3) 川口彰範「父親インタビューに見る父親の子育て意識の多様性——「子育ては楽しいですか?」という問いをめぐる語りの質的分析」『日本心理臨床学会第28回秋季大会発表論文集』、二〇〇九年、二〇七頁。
- (4) 新道賢一・濱田智崇・川口彰範「今日の父親の子育てをめぐる意識」、高石恭子編『子別れのための子育て 甲南大学人間科学研究所叢書 心の危機と臨床の知13』平凡社、一〇二一—二五頁。
- (5) 新道賢一「父親が子どもに出会うとき——就学前の子どもを持つ父親インタビューの分析を通して——」『日本心理臨床学会第28回秋季大会発表論文集』、二〇〇九年、一〇六頁。
- (6) 甲南大学人間科学研究所第三期子育て研究会『文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「(第二回) 子育て環境と子どもに対する意識調査—父親版—」報告書』、二〇一一年。
- (7) 甲南大学人間科学研究所「父親になる人、父親になった人、父親を応援する人のためのガイド 育て!パパ!ころ」、二〇一二年。
- (8) 甲南大学人間科学研究所第三期子育て研究会、前掲書。
- (9) 甲南大学人間科学研究所、前掲書。
- (10) 高石恭子『臨床心理士の子育て相談——悩めるママとパパに寄り添う48のアドバイス』人文書院、二〇一〇年。
- (11) 濱田智崇「父親が感じている父親の役割——就学前の子どもを持つ父親インタビューの分析を通して——」『日本心理臨床学会第28回秋季大会発表論文集』、二〇〇九年、二〇八頁。
- (12) 日本心理臨床学会第三回秋季大会自主シンポジウム「父親への子育て支援を考える——「意識」を育てる心理臨床の可能性——」二〇一二年
- (13) 京都大学大学院 教育学研究科 心理臨床学講座 准教授
- (しんどう・けんいち／臨床心理学)
(はまだ・ともたか／臨床心理学)
(かわぐち・あきのり／臨床心理学)